

「消防力を維持し、安全で 安心な暮らしを守る」



神戸市消防局長 鍵 本 敦

神戸は12世紀後半ごろ「大輪田の泊」と呼ばれていた港を基点に大陸と交流し、栄えてきた歴史があります。現在は陸、海、空（神戸空港）の総合交通拠点となっており、三宮駅周辺や臨海部などの再開発にも積極的に取り組んでいます。

40年前には世界最大の人工島であったポートアイランドは、産官学医の連携により「神戸医療産業都市」を推進しており、理化学研究所のスーパーコンピュータ「富岳」もあります。

さて、世界中で猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症の影響で先行きが見通せませんが、我々にとっては如何に消防力（救急、消防、救助、査察等の業務）を維持するかが最も重要です。神戸市消防局では、独自のガイドラインを作成し、感染防止対策を徹底するとともに救急消耗品の大量備蓄（常に6月分）をしてきました。また、スパコン「富岳」によるシミュレーション「救急車における感染防止のための換気に関する研究」を理研・東京工業大学・トヨタ自動車・神戸市消防局で行い、現場に活かしています。

また、感染拡大阻止の鍵となるワクチン接種では、ノエビアスタジアム神戸大規模接種会場で産官学医が連携し、昨年で延べ36万7,000人の方にワクチン接種を進めることができました。この大規模接種会場は消防局が統括責任者となり、延べ約1,500人の消防職員を派遣するなど、ワクチン接種の分野においても役割を果たしました。

一方、このコロナにより様々な分野においてデジタル化が進んだという側面もあります。警防分野では、119番通報時に通報現場と消防管制室の間で迅速に動画情報を共有することができる映像通報システム「KobeLive119」を全国に先駆けて運用していますが、昨年11月からは応急手当動画を通報者へ送信する機能も追加しました。

また、消防団では約2,000人の消防団員が「消防団スマート情報システム」に登録し、LINEとAI技術を活用して災害情報がGIS上で共有できるようにしています。

予防分野では、昨年4月から全ての手数料がクレジットカードで決済できるようになりました。引き続き各種オンライン収納システムの拡充や各種届出などの電子申請を積極的に進めるとともに査察や違反処理体制を強化し、建物や施設の安全確保につなげていきます。

今年は阪神・淡路大震災から27年を迎える年です。震災の教訓を風化させず、必ず来ると言われている南海トラフ地震や激化する自然災害への対応力として、自助・共助・公助をさらに充実させる必要があります。震災を機に結成した自主防災組織である「防災福祉コミュニティ」に対してはコロナ禍においても研修や訓練等が実施できるようICTを活用し、工夫しながら支援しています。

神戸は、大水害や大震災など、幾多の困難を乗り越えてきました。消防を取り巻く社会課題や困難を克服するため長期的な展望のもと、歩みを止めず、これまでの取り組みを再確認し、かつ先進的な取り組みを進め、消防職・団員一丸となって市民の安全で安心な暮らしを守ってまいります。